

マラソン・オブ・ホープ

右の硬貨の写真を見て下さい。この硬貨に描かれている少年は「テリーフォックス」というカナダ人の少年です。カナダの1ドル硬貨にはエリザベス女王と並んで彼の肖像が描かれています。また彼は史上最年少でカナダ勲章まで授与されているのです。しかし、この少年は、わずか22歳でこの世を去ります。彼が死へ旅立った1981年6月28日は「カナダ国民の最も悲しい日」とされています。では、なぜ22歳の少年がこれほどカナダ国民に愛されたのでしょうか。



テリー少年は子どもの頃からスポーツ万能の少年でした。中でもバスケットボールが大好きで18歳で進学した大学では迷わずバスケットボール部に入部し、すぐにその地区でも最も名が知れ渡ったプレイヤーに成長していました。その時の彼は「世界で一番のバスケットプレイヤーになることだ」と周りに語っていたそうです。しかし、そんなテリーにある日悲劇が襲います。ある日、練習の途中で膝の違和感を感じた彼は病院で精密検査を受けると、彼の足は、骨のガンと言われる骨肉腫におかされていたのです。医者から「命を救うためには足の切断しかない」と言われ、彼は手術を受けることを選択するしかありませんでした。「僕の夢はバスケットプレイヤーになることだ。それが叶わない今、僕は一体何をすればいいんだろう」そんな人生の希望を失っていたテリーに両親は「テリー自暴自棄にならないで、あなたはまだ若いんだから」となぐさめの言葉をかけますが、その言葉を受け入れることができなくて、両親に辛くあたるしかない日々を送りました。人に接するのも嫌に

なったテリーは毎日病院の中庭でぼんやりと過ごす日々が続きました。そんなテリーに毎日話しかけてくる小さな女の子がいました。「お兄ちゃん、こんにちは。とても天気がいいね」女の子は10歳くらいで同じ病院に入院していました。しかし、その時のテリーには女の子に返事をするともなく、無視するしかできませんでした。しかし、女の子は毎日、毎日話しかけてきます。そんな女の子にテリーも次第に心を開くようになり、少しずつ2人の間で会話が続くようになりました。「僕はね、バスケットボールがとても好きだったんだ。でも、もうこの足じゃバスケットはできないんだ。」そんなテリーに対して女の子は「お兄ちゃん、元気を出して。こんな私でも頑張っているんだからお兄ちゃんだって、きっと頑張れるわ」自分を励ましてくれる少女を見ると「弱い姿を見せられない」と思うようにテリーはなっていました。しかし、しばらくしてから、少女の姿が中庭に見えなくなりました。少女に会いたくなったテリーは看護師に少女のことを聞きました。「あの子なら一週間前になくなったよ。」実は少女はテリーと同じ病気で、進行がかなり進んでいて手のほどこしようのない状態だったのです。せっかくできた心を開ける相手が死んでしまったこと、また、自分と同じ病気で死んでしまったことで「自分もあっけなく死んでしまうのではないか」と人生を絶望するようになっていったのです。ここで全ての希望を失ってしまうのか……。しかし、テリーはこう考えます。「あの子は絶望の中にいた自分を救ってくれた。僕はあの子に何もしてやれなかった。」何とかしてあの子にお礼がしたい。その日の真夜中、テリーはあることを考えます。

彼が思いついたこと。それは、「ガンの治療、研究のために治療費を集めること」でした。「二度とあの子のような悲劇がおきないように、僕が研究資金を集めればガ

ン撲滅に貢献できるはずだ。」それがテリーの考えでした。しかし、普通に募金を集めても大した金額は集まらないだろうと考えた彼は、あるとんでもない計画を考えるのです。その計画とは自分がカナダを東から西にマラソンで横断し、その様子をテレビで中継させ、カナダ国中にアピールして募金を集めるという方法でした。目標金額2億円。目標金額もさることながら、カナダの東端から西端は8000 km、彼はそれを毎日、フルマラソンと同じ距離42, 195 km走り続けるというのです。しかも彼は義足を使い走るのですが、この話は今から30年前、当時の義足は今ほど性能が良くなく、歩くだけで精一杯のはずでした。

トレーニングを開始したテリー。しかし長い間、ベッドの上で生活していたため、思った以上に体力が落ちているので、数歩歩けば休むという行動の繰り返しでした。また、少し走ると足と義足の接合面がすれて皮膚がえぐれ血があふれ出ました。その痛々しい姿を見て両親は涙を流して「お願いテリー、もう見てられない。すぐにやめてくれ」とお願いしました。しかしテリーは「こんなこと大したことないよ。この傷は時間がたてばなおるけど、あの子は二度と帰ってこないんだ。僕は彼女に頑張るって約束したんだよ。」テリーの決心は固いものでした。テリーは鋼の精神で3年間練習を続け、とうとう義足を使って走れるレベルになったのです。

1992年4月12日、テリーはいよいよ総距離8000 kmに及ぶマラソンをスタートさせました。この日から毎日テリーは42, 195 kmを走り続けます。テリーの走りは少しずつメディアでとりあげられるようになりました。テリーの走る町には横断幕がはられ、沿道に並んで声援をおくるようになったのです。マスコミ報道も大きくなり、テリーは一躍、カナダ中の国民が知る有名人になります。このマラソンは「マ

ラソン・オブ・ホープ（希望のマラソン）」とよばれています。テリーは最初のうちは早朝にスタートさせ、午前中には距離を走りきっていました。しかし、少しずつ終わる時間がおそくなっていき、昼過ぎ、夕方とペースが落ちてきました。そしてとうとう一日かかって距離を走りきることができなくなりました。そんなテリーはインタビューに対して以前していなかった咳が目立つようになります。彼はそんな不調にもめげず、距離を目指して走り続けました。もはやテリーは走ることはできません。足をひきずりながらも、それでも一歩でも足を前へ運ぶのです。そんな明らかなテリーの変化に医者からドクターストップがかかります。「今すぐ走るのをやめなさい。さもないと君は死んでしまう」5373 km。それがテリーが命がけで走った距離です。再び病床のテリー。彼がおかされていた病は肺がんでした。ガンの細胞が肺に転移していたのです。実はテリーはガンが肺に転移していることをマラソンを始める前から知っていたのです。「テリー、こうなったら肺を一部切断するしかない。マラソンはあきらめてくれ」しかし、今のテリーにはマラソンが全てでした。「先生、僕には時間が残されていません。肺に転移したということは進行はかなり早い。手術したら体力が落ちます。3年間トレーニングしてきたんです。行かせて下さい」彼は自分の命と引き替えに、この無謀挑戦に挑んだのです。目標金額2億円、しかし、実際に集まった金額は、その1/4の5000万円でした。「僕のせいだ。僕が完走できなかったからお金が集まらなかったんだ。」しかし、この病院でのインタビューの様子がテレビで放送されるとある奇跡がおきたのです。「テリーの意思を受け継ごう」町には募金箱を持ち、通行人に募金を募る人々の姿があふれかえりました。そして、その運動はみるみるカナダ全土に広がっていったのでした。「動けないテリ

一の代わりに、私たちが彼の思いを実現させよう」テリーがマラソンをリタイヤしてわずか2週間、目標の2億円を大きくこえる50億の募金が一気に集まりました。「カナダのみんなありがとう……。」テリーはそのニュースを聞いてまもなく亡くなりました。享年22歳。20歳そこそこの青年が人々の心を動かし、50億円のお金を集めたのです。そのお金がガン治療研究に大きく役立ちました。テリーがマラソンを思いついたのが19歳、死ぬ4年前から人生が始まった人がいるということ。そして、それを成し遂げたのが右足を失った青年だったのです。彼が人々の心を動かした原動力は、一人の少女との出会いと別れ、そして多くの人たちを笑顔にしたいと思う優しい心だったのです。